

乙 第 号

橋本 彩 学位請求論文

審 査 要 旨

奈 良 県 立 医 科 大 学

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	乙第	号	氏名	橋本 彩
論文審査担当者	委員長		教授	吉栖 正典
	委員		教授	吉治 仁志
	委員		准教授	田中 利洋
	(指導教員)			

主論文

Adjuvant Hepatic Arterial Infusion Chemotherapy After Resection for Pancreatic Cancer
Using Coaxial Catheter-Port System Compared with Conventional System

膵癌術後予防肝動注におけるリザーバー留置術の検討—従来法と coaxial システムの
比較—

Aya Hashimoto, Toshihiro Tanaka, Masayuki Sho, Hideyuki Nishiofuku,
Tetsuya Masada, Takeshi Sato, Nagaaki Marugami, Hiroshi Anai, Hiroshi
Sakaguchi, Masatoshi Kanno, Tetsuro Tamamoto, Masatoshi Hasegawa,
Yoshiyuki Nakajima, Kimihiko Kichikawa

CardioVascular and Interventional Radiology

第 39 卷 6 号 831 頁～839 頁

2016 年 5 月 発行

論文審査の要旨

膵癌は予後不良であり、根治手術後、頻度の高い肝転移の制御は重要な課題の一つである。膵癌術後症例に対する肝動注療法は肝転移予防への寄与が期待されているが、動注用カテーテル留置の成功率が低いことが問題とされてきた。本研究では、近年開発された coaxial システムを用いて肝動注カテーテル留置術を行い、従来の留置法と比較した。

膵癌根治術後の補助化学療法目的で肝動注カテーテル留置術が施行された 93 例を対象とした。カテーテル交換を行う従来法 (Group A: 58 例) と coaxial 法 (Group B: 35 例) において、カテーテル留置成功率や手技時間、透視時間を比較した。また、最終的に留置された従来システム (51 例) と coaxial システム (42 例) を用いた肝動注療法の合併症や肝転移発生率、生存率を比較した。

coaxial 法である Group B は、Group A に対して留置成功率が高い傾向にあり (86.2% VS 97.1%, $P=0.084$)、肝動脈に蛇行・狭窄を有する症例においても有用であった。手技時間 (64.8 分 vs 80.7 分, $P=0.0051$) や透視時間 (14.7 分 vs 26.7 分, $P=0.001$) は Group B が有意に短かった。留置したシステム間で合併症に差は認めなかった (15.7% vs 16.7%, $P=0.898$)。術後 1 年以内での肝転移発生率は、従来のシステムが 9.9%、coaxial システムが 9.1% であった ($P=0.678$)。中央生存期間は 44 ヶ月であり、システム間で有意差は認めなかった ($P=0.312$)。

これらの結果より、膵癌術後予防肝動注において、coaxial システムを用いたカテーテル留置術は手技的成功率が高く、短時間でかつ被曝量を低減できると考えられた。留置後も従来システムと比較して遜色のない合併症の頻度、肝転移制御効果を認めた。今後、膵癌術後で特に肝動脈に蛇行・狭窄を有する症例においては、coaxial システムを用いたカテーテル留置を第一選択とすることが推奨される。

参 考 論 文

1. 子宮体部腺線維腫の1例

橋本 彩、高濱 潤子、丸上 永晃、武輪 恵、伊藤 高広、北野 悟、
吉川 公彦

臨床放射線 54(6):796-799, 2009

2. 腫瘍出血を契機に発見された膵頭部浸潤性膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)
の1例

橋本 彩、高濱 潤子、中込 将弘、末吉 智、福住 明夫、吉川 公
彦、藤野 光廣、北井 祥三

臨床放射線 57(5):721-725, 2012

3. Safety and optimal management of hepatic arterial infusion chemotherapy after
pancreatectomy for pancreatobiliary cancer.

Aya Hashimoto, Hideyuki Nishiofuku, Toshihiro Tanaka, Masayuki
Sho, Hiroshi Anai, Yoshiyuki Nakajim, Kimihiko Kichikawa

AJR. 198:923-930, 2012

以上、主論文に報告された研究成績は、参考論文とともに放射線診断・低侵襲治療
医学の進歩に寄与するところが大きいと認める。

平成 28 年 6 月 14 日

学位審査委員長

情報伝達薬理学

教 授 吉 栖 正 典

学位審査委員

消化器内分泌代謝内科

教 授 吉 治 仁 志

学位審査委員(指導教員)

画像診断・低侵襲治療学

准教授 田中 利洋